東海女子大学紀要，9，1989

中間言語研究

——音韻レベルにおける誤答分析——

北　山　長　貴

1：1　誤答分析：その発展と意味

構造言語学における言語習得へのひとつの貢献は対照分析研究（Contrastive Analysis Hypothesis=CA）であった。対照分析は目標言語（Target Language=TL）と母国語（Native Language=NL）の言語構造を比較研究することに始まった。たとえばRobert Ladoは、Lado(1957)で言語学習において、学習者はその言語のある部分は容易に学習し、またある部分は非常に学習しにくいと感じることがあるという。これは学習者の母国語に似ている目標言語の要素は習得しやすく、反対に異なっている部分は習得しにくいというものであった。そして多くの第二言語習得の研究はもっぱら対照分析の枠組みでおこなわれた。教授者にとってこの方法の利点は音声、音素レベルにおいて学習者の習得課程を予測できるとしたことであった。

対照分析を基本にした言語習得研究に誤答(error)という概念を持ち込んだのはS.Pit Corderであった。当初、言語習得そのものは習慣形成であるという考えに基づいていたため学習者が第二言語習得課程においておかす間違いは学習者の母国語の習慣に起因すると考えられていた。そして、ＣＡはもっぱら学習者が遭遇する困難な部分を予測して、そして教師はその部分を詳しく教えたり、または避けるようにしていた。Corder(1967)によると、“error”に対するそれまでの考え方は、誤答は考え方の欠如により起こるものでありどんなに努力しても誤答は起こるものであるので起こった後にそれを直せばよいというものであった。このような考え方は、audiolingual method,grammar and translation methodといった古い言語理論が背景となっていたためであった。First Language(＝Ｌ1）とSecond Language(＝Ｌ2)の習得のプロセスは異なるがその方法は同じであるとしている。つまり幼児がＬ１習得上でエラーをしそれを親に直されながら学習していくのと同様に、Ｌ２においても学習者が作り出す正しくない発話が言語習得の材料となり、その習得過程の一地点を示していることになる。そのために誤答は重要な資料を提供する。学習者の誤答は習得段階でのその学習者が使用している言語体系を示す要素となるものである。Corderはその要素が重要である理由を三つ述べている：１)教師が学習者の発達段階を知りどの位置にいるか解る、２)研究者に言語習得の資料を与え学習者がどのような方法で言語を習得していくかを知る手がかりとなる，３)Ｌ１習得におけるように誤答自体が学習者に欠かせない言語習得の材料となっている。

言語習得に関して対照分析は母国語と目標言語の構造の違いを比較しており、また誤答分析は学習者の誤りに注目している、それは母国語の干渉のみを誤答の分析の資料としている。対照分析においては教授する側の研究が中心であったが、誤答分析により学習者がいかに学ぶかということが問題となり、学習者へ研究の目が注がれるようになった。

しかし、対照分析は学習者が起こす誤りを予

測することはできず、単に起こった誤答の理由を説明するだけの力の弱いものであった。上記のような背景から、対照分析以外に第二言語学習者における規則的な音韻レベルの誤答を予測するべき新たな言語理論が必要となった。

Corder 以後、誤答分析に注目しつつその原因を母国語の干渉以外に求めたのは Jack C Richards であった。Richards（1971）の研究は、日本人、中国人をはじめ合計11ヶ国の英語学習者の誤答を調査し、その習得過程に及ぼす影響をまとめた。そして、第二言語話者の誤答を Over generalization, Ignorance of rule restrictions, Incomplete application of rules, False concepts hypothesized の４つに分類して、非干渉による誤答の存在と性質を明らかにしている。つまり、誤答の本質は学習者の母国語の背景とは無関係であるとしている。そして、Intralingual, developmental error が学習者の発達段階を示しており、これらの要因が言語習得の一般的な特徴を説明するものであるとした。ＣＡに関しては、母国語の干渉は第二言語習得者においては本質的であり、また、ＣＡはさまざまな干渉が存在していることを示してくれる点においては有意義であるとしながらも、多くの誤答は母国語の中にあるさまざまな規則の干渉、混同によるものであり、ＣＡでは解決できないとしている。

William Nemser は Nemser（1971）において、目標言語を使用する学習者が作る逸脱した言語体系があると提唱し、これを approximative systems と呼んだ。これは、学習者の習得段階、学習経験等によりそれぞれ異なったものであり、新しい要素を加えながらその体系が変わって行くのである。これは言語習得の発達という面をよくとらえたものである。

Nemser は Richards と同様に、言語習得者の発話の体系は学習者の母国語や目標言語では説明ができず、それ以外の要因があるとした。この様な学習者が持つと思われる、ある体系は言語教育とＣＡの発展に重要な意味を持つ。つまり、ＣＡはＬ１，Ｌ２の類似点や相違点を示すことにより学習状態の説明や予測をし、そして言語教育への応用を示唆するものであったが、上記２つの研究からＣＡの限界というものが浮き彫りにされた。

第二言語習得における誤答を Corder（1971）では“special sort of dialect”と考えている。その理由は、言語習得者はコミュニケーションを目的としてＬ２を使用し、その過程で誤答が現われる。それは一つの体系をもっており、一連の規則により記述できるものであり、ある文法体系をもっていると考えられる。つまり、学習者が発することばは一つの言語であり、それには文法があるということである。そして、この学習者が持つ dialect（方言）は一般的に考えられるものとは違い、個人の有する idiosyncratic dialect（個人方言）である。これはまた、詩人などが意図的に作り出す間違い（deliberately devient）や、失語症患者の間違い（pathologically devient）とも性質が異なっている。反対に、言語習得者の“idiosyncratic dialect”は幼児の言語習得において見られるものと似ているとしているのは、言語習得を習慣形成の一つとして考えているからである。

Corder, Nemser, Richards らの研究により誤答に影響を与える要因はＬ１からだけの干渉ではなく、何か別の体系の文法の存在を指摘した。このような過程をふまえて Interlanguage ＝ＩＬ（中間言語）という用語を提唱したのが、Larry Selinker であった。これは学習者が持つ一つの言語であり、Ｌ１とＬ２の中間に位置するものであり、ＮＬ，ＴＬとは何か違った第三の言語というべきものである。

Selinker（1972)によると、中間言語には五つの心理言語学的なプロセス（language transfer, transfer of training, learning strategies, communication strategies, overgeneralization of TL structure）を持つと述べている。中間言語の提唱により誤答分析とは、誤答をてがかりにして、ある学習者の中間言語をしらべてその習得過程を明らかにしようとする仕事だということに発展してきた。そして、中間言語話者の誤りが固定してしまう化石現象（fossilization）の概念化を試みた。これも心理的な要素が多大に含まれているために、統語や意味のレベルよりも実際に口という器官を動かす音声レベルにおいて

顕著にみられる。

1：2　MDHと普遍文法

誤答分析は中間言語体系という概念の導入により、多くの研究が進められた。その過程において、中間言語自体に関していくつかの疑問点が現われた。第一点は、学習者が作り出した発話が母国語や目標言語の文法とは違ったものならば、中間言語というものはまったく独立した文法体系を持つということなのか。そして第二点は、もし中間言語が独立した体系ならば、ＩＬの音韻規制は自然言語と同じ体系を持つのかということである。

このような問題点に答えたのが、Fred R. Eckman（1977, 1981）であった。Eckman は“Markedness Differential Hypothesis=MDH”を提唱した。ＭＤＨは学者が直面する困難な部分というものは、ＮＬ，ＴＬの文法および普遍文法が提示する有標性という三つの体系の比較により次のように分類できるとしている：１）ＮＬと異なったＴＬの部分で有標とみとめられる部分の習得は困難である，２）ＮＬよりＴＬにおいて相対的に難しい部分は有標であり、これは自然言語の有標性の度合いと一致する，３）ＮＬと比べＴＬにおいて異なった部分であっても無標と認められる部分であればその習得は難しくないというものである。以上のようにＭＤＨはＣＡＨの欠けている点、すなわち中間言語における誤答を予測する力の欠如を指摘し、ＭＤＨをＣＡＨに組み込むことを提唱した。そして、Eckman は中国語とスペイン語の話者が英語を習得する過程における調査を行い、その結果、母国語や目標言語からは独立していると考えられている中間言語の音韻規制において自然言語のなかにおける規制と同じ体系があると提唱した。これは中間言語が独立している体系を持ち尚且つ他の自然言語と同じ体系をもっているということである。そして、単にＣＡの様にＴＬとＮＬを比較するだけではなく“relative degree of difficulty”（困難さの度合い）という概念を導入することにより誤答を正しく予測するものとした。この困難さの度合いは個別言語におけるものではなく、普遍文法におけるものでなくてはならない。このことは、中間言語の音韻体系に普遍文法と有標性の問題を持ち込むことになった。普遍文法（Universal Grammar）は言語を類系的に分類し、普遍的でないものはＬ２の習得において困難が予想され、普遍的、自然な部分は習得が容易であるということである。そして、有標性を導入することにより、目標言語に関係なく普遍的な困難さという点から言語習得の研究を試みている。このように、普遍文法からの有標性ということを取り入れたMDHは学習者が抱える困難な部分を予測できるという意味において対照分析を否定するものではなくこれをより発展させたものといえる。

1：3　音韻過程（Phonological Processes）

幼児は音声習得において体系的な間違いをすると言われている。幼児が目標としていることばと実際に発せられることばの間にはランダムではない音声、音韻的体系を持った関係がある。このように、二つのことばにおける音韻過程をPhonological Processes（=PPs）とよぶ。PPs で見られる現象の中にはどの言語、どの幼児にでも共通と思われる過程があり、普遍的な意味を持っている。Marlys A. Macken and Charles A. Ferguson（1981）では幼児における PPs は以下のように分類できるとしている。

１）Phonological Process
２）Assimilation Process
３）Syllable Structure Process
４）Reduplication Process

１）は一つの分節音を他の分節音と入れ替えるものである。例えば、“there”を［dɛ］と発音するように摩擦音が閉鎖音に換わるものである。これは有標性の問題も含まれており、摩擦音は閉鎖音より発音上複雑であり有標であるということになる。２）は同じ単語内や隣の単語の影響で音が同化する現象で“duck”を“guck”と発音する場合である。これは consonant harmony とも呼ばれる。３）は“bed”を［be］と発音するようにある分節または音節を省略する

deletion process（省略過程）である。そして、二音節以上の語を一音節にする consonant cluster reduction（子音縮小）も含まれる。このＰＰｓはどの言語の習得過程に於いても顕著に現われ、特に、ＣＣＶ，ＣＶＣなどの複雑な音節を単純なＣＶという形にする。同じような現象はＬ１習得以外では言語変化、言語借用において母音を挿入する epenthesis により、一つの複雑な音節を複数の単純なＣＶ音節に分けることがある。４）は“water”を［ｗɔｗɔ］と言うように、一つの単語のあるＣＶ音節を繰り返し発音する。これは幼児のＬ１習得においてはどの言語においても観察されるが、大人のＬ２習得には見られない。

Ｌ２習得の音韻規則においては、ＴＬとＩＬのあいだに音声上の体系的な相関関係があることを述べてきたが、Ｌ２習得においても PPs は幼児の言語習得における PPs と同じ過程がみうけられる。以上のことから、PPs はＬ１およびＬ２習得の両方に作用する過程であるとし、母国語習得に共通するこれらのＰＰｓは発話産出とその理解に普遍的な制約を与えているものと考えられる。

１：４　音節構造と普遍文法

Tarone (1980) は６人の英語学習者の調査から中間言語の音節構造には、三つの要因が影響を与えるとした。つまり、Ｌ１のＣＶ構造をＴＬに持ち込む language transfer, 複雑な音節構造はＬ１習得時に行なった同じ操作方法で単純化する reactivated L1 acquisition, そして、単純な開母音節（ＣＶ）をＩＬが作り出すという普遍的な傾向をしめす universal process である。この結果、具体的には、ＣＶＣの様な音節は epenthesis（母音挿入）によりＣＶＣＶという形になり、またＣＶＣは同様に consonalt deletion（子音脱落）によりＣＶとなり中間言語の音節構造は単純化された。音節に及ぼされる大部分の影響は母国語干渉であったが、ＣＶ構造を作る原因は干渉ではなく音節を単純化しようとする普遍的な傾向によるものとした。また普遍文法という点から述べると、ＣＶという音節構造がもっとも望ましい構造でありこれはどの言語にも見られる。もしある言語が複雑な音節を持っているとすればそれは有標であることを意味する。そしてＣＶＣＣという構造を持つ言語はＣＶおよびＣＶＣという構造を同時に持つと考えられる。例えば、学習者のＬ１でＣＶという音節しか存在しなく反対にＴＬではＣＶ，ＣＶＣ，ＣＶＣＣ，ＣＶＣＣＣの音節があるとすると、ＭＤＨ，ＣＡＨが予測することはＣＶ以外の音節の習得が難しいということだけでなく、ＣＶＣよりＣＶＣＣが、そしてＣＶＣＣＣという音節がもっとも困難であるという様な困難さの段階をも予測する。この様な Tarone の母国語の干渉と普遍文法の中間言語の研究は Macken & Ferguson の提唱した phonological processes の理論とともにさまざまな議論を第二言語習得の研究にもたらした。

Carlene E.Sato は Sato (1983) で二人のベトナム人の英語習得におけるＩＬ音節構造の研究を行ない音節構造にもっとも強い影響を与えるのはＬ１干渉であるとした。これは、Tarone の研究に対して、１）語末の子音結合において開音節よりも閉音節を作ること、２）語頭の音節より語尾において音節生成に困難を感じること、そして３）母音挿入により音節は構成されないこと、の以上三点を述べた。これは母音挿入などによるＣＶ音節構造を作り出すという普遍的な傾向に反例を提示したものである。同様に、Bronwen Benson (1972) においても、ＴＬである英語と同じ複雑な音節構造を持つベトナム人の誤答分析を行ない母国語干渉の割合が多いことを指摘し、同時にさらに多くの資料によるＬ１とＩＬの研究を促している。

Barbara Hodne (1985) では二人のポーランド人の英語習得においての調査を行い、ＣＶ構造を作り出す普遍的な傾向の研究をすすめた。そして、Tarone の結果と同じように母国語の干渉とそれ以外の要因が音節構造に影響を与えているとした。しかし、目標言語の音節を単純なＣＶ構造に換えるという普遍的な傾向というのは、Eckman (1981) も述べているのと同様に、Ｌ１の背景によりその程度が違う“variable”（可変的）な傾向があるとしている。また彼女

は学習者の調査時の心理的な影響も誤答に関係していることを付け加えている。

2：1　誤答分析：調査

以上に述べてきたように言語習得理論における誤答分析の歴史は、二つの言語体系（L1，L2）を単純に比較することに始まりその後多くの学者の調査研究により発展をつづけてきた。そして、言語習得過程において学習者が作り出す母国語とも目標言語とも違う第三の言語ともいうべき中間言語という存在が明らかにされ、現在は中間言語体系の解明が進められている。また、その解明は第二言語習得という観点からだけでなく、幼児における言語習得の過程の導入、さらには、人間言語の文法体系の骨組みとなる抽象的で、広範囲にわたる普遍性を規定する普遍文法を取り入れるまでになった。具体的な研究としては、Taroneが提唱している中間言語体系における普遍的な傾向を持つと考えられている開音節構造であり、さまざまな議論が展開されている。本稿はTaroneが提唱している開音節構造の議論を中心に、日本の高校生における英語習得の過程における誤答分析を試みたものである。

2：1：2　分析方法

調査は神奈川県の県立高校の生徒を対象とし、入学した昭和61年から卒業までの3年間継続的におこなった。方法は英作文の練習ということで教科書の例文の書き取りテストをした。毎回4～6題で各文とも10語前後の基本文であった。

学年全体では500名ほどであるが、調査の対象となった生徒はその中でわたしが担当したクラスの生徒である。1年時に138人、2、3年時にはそれぞれ230人であり、延べ600人ほどが調査の対象となった。収集した例文は1年時に5,556文（1人あたり約40文)、2年時で10,486文（1人あたり約46文)、3年時は2学期までで3,512文（1人あたり約16文）であり、3年間で合計19,554文となった。

三年間で収集された英作文の数は二万弱となり、これを資料として分析を行なっていく。全例文中、誤答は496ヵ所あり、そのうち子音に関しては159ヵ所、また母音は337ヵ所となった。本稿では子音、母音のそれぞれの誤答について考察を加えていくものである。確認された誤答は以下に示す基準に従って分類をしていく。

1）Selection（選択）
2）Addition（付加）
3）Omission（削除）
4）Ordering（順序）

2：2　子音分析

159ヵ所の子音は以下のようにまとめられる。

誤答の分類：子音

カテゴリー	内　　容
選　択	1）有・無声化　16% 2）調音　11% 3）スペリング　65% 4）その他　8%
付　加	1）子音連結　99% 2）その他　1%
削　除	1）子音連結　22% 2）単子音 a)同器性音　24% b)スペリング　22% c)その他　32%
順　序	1）/rV/と/Vr/　41% 2）その他　59%
その他（複合）	1）省略と選択　28% 2）付加と選択　36% 3）付加と省略　36%

2：2：1　選択

選択に関しての誤答は多く合計101ヵ所あった。1）の有声、無声化では本来音韻的には無声の音を有声にしたり、またその逆を行なう現象が見られた。例えば、“sat”を“sad”と変化させるものであり、特に語尾において/ｔ/を有声化させている。そして、“great”, “blanket”などの語で合計11ヵ所見られた。その他には、“think”の“k”が有声化された例もあった。無声化としては“had”を“hat”と変化させるもので、この他に“village”の“v”、“everything”の“g”、“things”の“g”などで同じ現象が見られた。以上の誤答においては、調音点、調音方法は変えず、有声、無声の変換だけである。

2）では調音点、または調音方法を変えたために起こった誤答が全体の11%あった。例えば、“natural”を“nanural”に、また“fail”を“fait”に変化させる。これらの例は、共に調音点（歯音）は変更してはいないが、調音方法がそれぞれ、閉鎖音から鼻音、側音から閉鎖音へと移っている。反対に調音方法は変えず、調音点を移して、“weak”を“weat”とするような例もあった。

この他に、“umbrella”を“unbrella”とするように、同じ調音点—この場合は両唇音—がつづく時に一方の調音点をずらす現象—両唇音から歯茎音に変わる—が見られた。同じように“important”,“empty”をそれぞれ、“inportant” “enpty”とする例があった。

以上の誤答は単に音素レベルにおける選択ではなく、その下位範疇に属する音韻素性の選択によるものである。つまり、音韻的に説明を加えることができる一つの体系を持った誤答であるといえる。

次に、3）は“orthographical error”（正字法）に関する誤答であり、特に“l”と“r”の選択間違いは多く合計44ヵ所あり、“l”を“r”の代用とするものが19ヵ所、その反対が25ヵ所あり以下のような単語において見られた。

“l”＞“r”; gentleman, larger, flying, popular, living, clossed, glass, learned, pleasure, blanket, classroom, television, natural.

“r”＞“l”; right, from, spring, work, room, library, grew, umbrella, fresh, pretty, rainbow.

この他には、“v”と“ｂ”を混同しているもので、“visited”を“bisited”、そして“library”を“livrary”とする例。また“t”を“th”と表記して“October”を“Octhober”とする例がありこの他に“water”, “exciting”等でも見られた。

“r”と“l”のスペリングに関しては日本人の“r”アレルギーと言えるくらいの不得意な部分である。そして、“v”と“b”、“t”と“th”についても同じ様に日本語には存在しない音の習得が完全ではないためにこのような混乱が学習者に生じてしまったようである。

次に見られた誤答は“exciting”を“exsiting”とするような誤答である。これは英語の［ｓ］という発音に対しては“s”、“c”の両方においてその表記が可能なためであり、英語における正字法の複雑さを反映している。この他に、“nice, peace, Pacific”等の語で見られた。そして同じ理由において、“g”と“j”, “c”と“k”,“s”と“t”のスペリングにおいて“generally”を“jenerally”,“camera”を“kamera”,“television”を“televition”とする例がある。

英語では一つの音に対して複数のスペリングが存在しておりその習得には時間がかかるようである。これは母国語の影響というよりは目標言語自体の複雑さによるものが誤答に影響を与えているのではないか。

2：2：2　付加

付加は不要な音を付け加えることだが、今回の調査においては、二種類の誤答が分析された。そしてそのほとんどが同じ子音を重ねるconsonalt doubling（子音の二重化）であり、合計12例ほどあった。例えば、“morning”を“morrning”とするような場合であり、以下のような単語に現われた。

coming, morning, crying, family, waiting, closed, money, writing, between, beautiful.

これらのうち、半分の誤答が動詞の派生形（分子を作るために“-ed, -ing”を付加する場合）

においてであり、学習者の間違いは英語特有の規則を習得していないことに起因する問題と考えられる。その他に、consonant adding（子音付加）の例はたった一つしかなく“lines”という単語が実在するために判断が難しいが、一応音節構造は、ＣＶＶＣからＣＶＣＶ（Ｃ）という開音節を連続させる音節構造に変わっている。

２：２：３　省略

必要である音を省略してしまう現象は、大きく分けて二種類存在した。一つは同じ子音が重なる子音連結においてその一方を省略するdouble consonant deletion（二子音省略）、そして単純に一つの子音を省略するもの single consonant deletion（子音省略）がある。

まず、double consonant deletion は“umbrella”を“umbrela”とするようなもので合計８ヵ所、“umbrella, generally, clossed, admitting, coffee, office.”などの６種類の単語において誤答が観察された。日本語では子音を重ねることはないので学習者にとって習得が困難と予想される。さらに、誤答が現われた単語を見ていくと省略はすべて母音または半母音の前にある子音が省略されている。つまりＣＣＶがＣＶという構造になり、その結果として“generaly”のようにＣＶの連続する開母音音節が作られている。

次に、single consonant deletion であるが、これは、“scolded”を“scoled”とするように、特に、子音が連結している場合にその一方の子音を省略する誤答が観察された。そして、以下のような単語においても同じ現象が見られた。

could > coul, children > chidren, blanket > blaket, fluently > fluenty, oranges > orages, mountain > moutain, around > aroud.

省略された子音連結はそれぞれ、“-ld (-), -nk-, -tl-, -ng-, -nt-, -nd.”であり、これらに共通する特徴は同器性の音(homorganic sound)ということである。つまり、二つの子音が連続して表記される場合、調音点が同じであるという同器性の音であると学習者はそれを一文字で表記してしまうようである。そして、二子音連続の内、最初の子音のほうが省略される傾向があるようだがその理由ははっきり解らない。

Single consonant deletion にはもう一種類の誤答が見られた。それは、“Washington”を“Washinton”とするように、アルファベット二文字以上（“ng”）で一つの発音（［ŋ］）となる単語について共通して見られる省略である。また、“watching”を“waching”とする例では、“tch”の発音が［tʃ］であるため日本語の“チ”と混同したかのようにローマ字式に“ch”と表記している。つまり、ある一つの発音に対してそれを二文字以上で表記する場合においてもその音を一つの音素とみなしてしまい、一文字の表記を与えている様である。この他に“checked”を“cheked”,“writing”を“riting”、そして“spring”を“sprig”とする誤答が認められた。さらに、これらの単語においては子音省略によって開母音構造を作っている。

２：２：４　順序

音韻レベルにおいて「順序」に関する誤答は子音、母音分析の両方に関わることになる。ここでは、互いに隣接する二音がその位置を転換する Metathesis（音位転換）について考察をしていく。音位転換に関する誤答の内41%が“ｒ”の音を含む/rV/Vr/の転換であり、以下のような単語において誤答が見られた。

turn, trun, injure, heard, learned, fresh, strong, story, diary, written, appears.

一般に、音位転換の理由は二つあるとされている。それは、大人の不注意な発話や調音器官の未発達な幼児にみられる様な偶発的な場合と、そして、OE における“bridd”という語が、ME において“bird”と変化するように歴史的な音韻規則の過程によるものがある。以上の理由からでは学習者が作り出す音位転換は不注意としか考えられない。しかし、音節構造という点から誤答例をみていくと、“true”を“ture”, そして“diary”を“diray”としていることから音位転換が単語の音節形成に影響を与えている様であり、中間言語として学習者が開音節構造の単語を作っているとも考えられる。

2：2：5　複合

子音に関する誤答を四つのカテゴリーから考察を加えてきたが、複数のカテゴリーが複合した誤答があった。1）は“usually”を“usuary”とするような、double consonant deletion（二子音省略）と substitution（代用）の複合であり、他に、“umbrella”を“umblera”とする例もあった。これも子音連結をなくして開音節構造を作る結果となっている。2）は“country”を“countlly”とするような、consonant doubling（子音の二重化）と substitution（代用）の複合であり、その他に“early, feels”等の単語の例がある。ここでは、日本語より英語において顕著にみられる子音連結を作っており、L2の overgeneralization（一般化）をしている。そして、3）は“admitting”を“addmiting”とするように、本来同じ子音がつづく所を他の音節において子音を重ねている。これは、consonant doubling（子音の二重化）と double consonant deletion（二子音省略）の複合である。他の例としては、“tomorrow, umbrella”をそれぞれ“tommorrow, unbllera”とする誤答が見られた。これは、子音をどこかで重ねなくてはいけないという学習者の心理的な要因に基づくものと、英語のスペリングの規則の複雑さによる誤答といえる。

2：3　母音

337ヵ所におよぶ母音の誤答も子音と同じ基準により分類し、以下の表にまとめてみた。なお、Ordering（順序）は母音と子音の位置転換に関するものであったために前述している。

2：3：1　選択

選択については132ヵ所の誤答があり、その内の60%を占める、[e, i, ə:r, r, ei,] の4つの音とスペリングの関係を考察していく。

誤答の分類：母音

カテゴリー	内　　容	
選　択	1）[e]	25%
	2）[i]	13%
	3）[ə：r]	11%
	4）[e i]	10%
	5）その他	41%
付　加	1）語尾の”e”	32%
	2）”r”	24%
	3）母音挿入	36%
	4）その他	8%
削　除	1）”e”	50%
	2）”r”	14%
	3）その他	36%

[e] 音はさまざまなつづりで表記される音であり、選択の誤答の25%を占め、“end, them, fence, never, festival”において、“e”を“a”と表記している。[e] は“e, ea, a”とつづられるので“festival”を“fastival”とするのはTLの複雑さによるものと考えられる。

次に、“manager”を“maneger”と表記する場合がある。これも、“a”を [i] と発音させる英語の複雑さのため習得が困難であるためと、「マネージャー」と日本語の音韻で表記しているためだと考えられる。このような誤答は13%をしめ以下のような誤答が見られた。

pretty > pritty, picture > pecture, knowledge > knowlidge.

[ə:r] 音の誤答は18%でさまざまなつづり方があった。しかし、語尾の [ə:r], [ə] に関しては歴史的にもその表記が一定しておらず、“tailour”などは8種類以上ある。歴史的な過程と、学習者の誤答に共通のものがあるのは興味深く、以下の単語における誤答もTLの持つ規則の複雑さがその理由と考えられる。

yersterday > yesturday, yesteaday, yestarday; turn > tarn,tern; earth > eirth.

her > har、popular > populer, ear > ere, warmer > warmar, bird > bard.
girl > garl. heard > heord.

そして、"ai, a" と表記して［ei］と発音する語において、"ai" を "ei"（again > agein, remained > remeined, afraid > afreid）そして "a" を "e"（name > neme, baby > beby, skater > sketer, lake > leke, Shakespeare > Shekespeare）とする誤答がそれぞれ10%あった。やはり、［ei］音も "a, ai, ay, ei, ey, ea" とさまざまに表記されるために英語のスペリングの複雑さが原因であると考えられる。学習者はより発音に近い "ei" を選択している。また "e" と表記した学習者は英語における二重母音を習得していないからではないか。

2：3：2　付加

付加は誤答全体の37%をしめ、その特徴は三つに分類できる。

第一番目は語尾における "e" の付加であり、"glass" が "glasse" という形になり、同様に "dangerous, from, about, diffcult, pilot, strong, New York, beautiful" などの単語で誤答が確認された。母音を付加して開音節を作り出すのは母国語の影響とも考えられる。例えば、日本語の音韻体系に照らし合わせてみると、"glass" は/gurasu/, "about" は/abauto/となり、それぞれ、"glasu", "abauto" などと、表記されるはずである。しかし何故か、すべて "e" が付加され開音節が作られている。このことから、単に母国語の影響による誤答ではなく、中間言語体系における母音の付加と考えられるのではないだろうか。

第二番目は、二重母音の/ou/、長母音の/a:/、単母音/æ/等の後に "r" を挿入して、"October" が "Octorber", "father" が "farther" となる例であり、以下の単語において同様の誤答が見られた。

October, smoking, wrote, classroom, headache, fast, father, passenger.

これらの三音は日本人には習得しにくい音の様である。特に/ou/は［ɔ:］となってしまい未習得部分の第二要素を補うかのように "r" を挿入している。

第三番目は、子音が連続する場合その間に母音を挿入する例が36%あった。以下のような誤答が見られた。

sky > skay, pretty > puretty, marks > markes, heard > heared, looks > lookes, answer > ansawer, appears > appeares, traffic > toraffic, accident > acucident

このような複雑な音節構造を母音挿入により基本的である開母音音節の連続体に解体している。

2：3：3　削除

削除は誤答全体の32%であり、その内50%が/e/に関するものである。特に、語尾における "e" の削除は多く "home" を "hom" とする場合であり、16種類の単語において誤答が確認された。英語では閉母音で単語が終わることもある。学習者は母国語にはないこの目標言語における特徴を一般化（overgeneralized）してしまっている。

反対に、/r/の削除に於いては "large" を "lage" とするように開音節を作り、以下の様な語においても確認された。

for, world, marks, never, important, turns, morning, thirty, Switzerland.

これらの単語のなかで "r" は全て長母音を形成している半母音の働きをしている。音節構造という点から考えると、/r/の削除により［CV:r］から［CV］という音節構造に変わっている。

2：4　まとめ

ある音韻現象が、他の音韻現象より自然であったり、または予測できる分節音があるのと同じように、自然な音韻過程というものが存在するようである。例えば、2つの子音の間に母音を挿入する規則は、同じ環境において子音を挿入するよりも自然である。また、ある音を語尾の位置で無声化する規則も、同じ環境でそれ

らを有声化する規則よりも自然である。この様な現象は本稿の子音、母音のそれぞれの誤答分析において同じく確認された。

目標言語の干渉は子音、母音の選択両方において確認された。これは、"r" と "l" の混同に見られるようにＬ１とＬ２の体系の違いをも含み、英語自体が持つその規則の複雑さ、または不安定さというものが学習者に誤答を引き起こさせる要因になっていると考えられる。

音節構造に関しては、子音または母音の付加、子音の削除、順序における音位転換がそれぞれ誤答の中に見られた。そして、その結果として、より自然な構造である開音節を作り出している。これは中間言語体系における一つの普遍的な傾向として存在するものと言え、Tarone の提唱する事と一致すると考えられる。

以上のように、自然な規則が中間言語体系に認められると、その音韻過程を予測することができるようになるはずである。例えば、普遍的な音節構造をもたらす自然な規則に目を向けるなら、それらの規則から生じる音節構造は、音節構造を特徴づける有標化という問題と両立するのではないか。つまり、普遍文法における有標化と自然な規則には類似性があり、その関係が中間言語の音韻過程にも存在するようである。

音韻の研究目的は、単に個々の音の研究に留まる事ではなく、言語の体系的な特徴付けである。本稿における中間言語の誤答分析もこの目的を遂げるための例証となることを願う。しかし、実際に集めた資料の中から「誤答」を探しそれを分類することは容易ではなかった。つまり、"error"（誤答）は "mistakes" とは違い体系的な "間違い" ということであるがその判断は難しい。本稿においてはその分類の基準を Corder によるものとしたが、その基準もこれから再考の余地があると思われる。今後この分析が理論的な発展と、学校現場における英語教育への応用につながれば幸いである。

References

Benson, Bronwen. (1972), "Universal Preference for the Open Syllable as an Independent Process in Interlanguage Phonology, "Language Learning, 38, 221-235.

Corder, S.Pit. (1967), "The Significance of Learner's Errors, "International Review of Applied Linguistics, 5, 4, Jul., 161-170; Richards (ed.) (1974:19-30); Corder (ed.)(1981:5-13).

……(1971), "Idiosyncratic Dialects and Error Analysis, "International Review of Applied Linguistics, 5, 2, May., 147-160; Richards (ed.) (1974:158-171) ; Corder (ed.) (1981: 14-25).

Eckman, R.Fred. (1977), "Markedness and the Contrastive Analysis Hypothesis, "Language Learning, 27, 2, Dec., 315-330; Ioup, G. & Weinberger, S.H. (ed.)(1987:55-69).

……(1981), "On the Naturalness of Interlanguage Phonological Rules"Language Learning, 31, 1, Jun., 195-216; Ioup, G. & Weinberger, S.H. (ed.)(1987:125-144)

Gimson, A.C. (1981), Introduction to the Pronunciation of English. 3rd ed.: Edward Arnold.

Hodne, Barbara. (1985), "Yet another look at interlanguage Phonology: The modification of English syllable structure by native speaker of Polish, "Language Learning, 35, 405-419.

Kenyon, J.S. (1982), American Pronunciation. 11th ed.; Ann Arbor, Michigen:George Wahr Publishing Company.

Lado, Robert. (1957), Linguistics Across Cultures. Michigan.

Macken, M.A., and C.A.Ferguson. (1981), "Phonological universals in language acquisition, "H.Winitz (ed.), Native language and foreign language acquisition. Annuals of the New York Academy of Science, Volume 379.

Nemser, William. (1971), "Approximative Systen of Foreign Language Learners, "International Review of Applied Linguistics, 9, 2, May., 115-123; Richards (ed.)(1974:55-63).

Richards, Jack.C. (1971), "A Non-Contrastive Approach to Error Analysis, "ELT, 25, 3, Jun., 202-219; Richards (ed.)(1973:114-135).

Sato, Carlene. (1984), "Phonological Processes in second language acquisition:Another look at interlanguage syllable structure. "Language Learning, 4, 43-57.

Selinker, Larry. (1972), "Interlanguage," International Review of Applied Linguistics, 10, 3, Aug., 209-231; Richards (ed.)(1974:31-54).

Tarone, E.Elaine. (1980), "Some influence on the syllable structure of interlanguage phonology. "International Review of Applied Linguistics, 17, 2, 139-152.